

# テレビと歌

—昭和三十年代と一九五〇年代—

小田 忠

## I テレビから受けたもの

昭和三十年代と一九五〇年代が重なり合う期間は、昭和三十年（一九五五）～昭和三十四年（一九五九）の五年間しかない。この時代が少年期の黄金時代だった。誰もが少年期の黄金時代が存在するように、忘れることのできない憤怒や悔しさなどが体験として心底に沈殿している。

遊びは子供が造る特殊な芸術だ、冷たい感情や差別された不快な気持ち忘れさせてくれる。だから遊びを知らない子供達に遭遇すると〈不幸〉としかいようがない。子供が持つ夢と不安が同居していた頃の自分にとって切り離すことができないものがある。それが〈映画〉〈テレビ〉〈音楽〉〈芝居〉〈野球〉〈水泳〉だったのかも知れない。

い。

映画を見てファンになる人は多いといえる。どうして映画の虜になるのか。男優や女優を好きになったり、監督が気に入ったり、更に映像の美しさ、脚本の出来が良いこともあるし、きれいな映画音楽や素晴らしい衣装に目を見張ることもある。

スクリーンに映しだされた姿にうっとりしたり、巧妙な仕掛けに感動するのもこの年頃であるかもしれない。心を慰撫するものがスポーツでもよいし、詩を書いてもいいし、映画を見ても良かった。その中にテレビがあっても不思議ではない。テレビは、当時さまざまな人々に多くの影響を与えたといっても過言ではない。

## 一 三木鶏郎の場合

私の家庭には、まだ町内に一台か二台しかない時代にテレビがやってきた。テレビ受像器が、世間より比較的早く設置されていた。昭和三十三年には、三分間の〈スーパーマン〉や〈日真名氏飛び出す〉を見ていたし、大相撲や紅白歌合戦も見ていた。この時代に忘れることのできないのが、CMである。

多芸で知られる三木鶏郎が、制作したCMは記憶に残っている。

TOSHIBA-EMI LIMITED から出された「懐かしのCMソング大全」

(一九五一年～一九五九年)を聞くと、三木鶏郎が係わったCMソング中、全く記憶にない作品は、〈ボクはアマチュア・カメラマン〉〈やっぱり森永ネ〉〈ハマフォームの唄〉〈ポポンとね!〉〈ノーシンの唄〉〈仁丹の歌〉〈日清紡の唄〉、これらのCMソングは、かつて聞いたことはあるが覚えていない。いまでも鮮明な印象としてあるのは、次の歌である。

「どなたになにを」

福助、作詞：サトウハチロー 作曲：三木鶏郎、歌：中村メイコ

「ミツワ石鹸テーマソング」

ミツワ本舗、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：コーラス

「花王石鹸の歌」 花王、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：楠トシエ

「明るいナシヨナル」

松下電器、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：三木鶏郎合唱団

「カーンカーンカネボウ」

「キリンキリン」

キリンビール、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：ダークダックス

「バヤリースは夢の味」

アサヒビール、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：フランキー堺

「緑の小箱」 加美乃素本舗、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：安西愛子

「牛乳石鹸の歌」(牧場の牛)

牛乳石鹸共進社、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：中原美沙緒

「シャンシャンオーシャン波の上」

メルシャン、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：楠トシエ

「ルルの歌」

三共、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：伴久美子

「グリコアーモンドチョコレートとうた」

江崎グリコ、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：コーラス

「ミネビタールの歌」

三共、作詞・作曲：三木鶏郎、歌：伴久美子

テレビ開局前のラジオ時代から活躍していた三木鶏郎の才能がよくあらわれている。

テレビは映像が中心のはずだが、イメージがあまり残っていない。

テレビ草創期の頃、三木が音楽を中心に考えていたのは、当然だとしても、映像で印象に残る深いCMは少なかった。これはテレビ技術者や関係者にとって、視聴者にインパクトのある映像を送る力がなかったといえる。

項目	年代				
	1950年代	1960年代	1970年代	不明	合計
地方PR・社歌・社名入	12	12		3	27
その他	5	11			16
趣味・文具	6	5			11
食品	17	16		1	34
生活・日用品	18	17			35
衣料・靴	24	10			34
飲料・酒	15	11	3		29
乗り物関係	11	12			23
健康・薬	13	17			30
電気・家電	12	20			32
金融・百貨店	8	7			15
合計	141	138	3	4	286

三木鶏郎のホームページに多くのCMソングが掲載されている。それを表にした。<sup>2)</sup>

三木鶏郎のCMソング制作が旺盛な時代は、一九五〇年代、一九六

〇年代が中心になっているし、作曲の仕事も一九六八年、五十四歳の時に発表したCM(ハッピー石鹼)〈郵便番号GOGO〉(富士急ハイランド)などが最後だった。私達は、三木が三十五歳から五十五歳の間、とりわけ脂ののりきった期間の仕事を知っていたのである。

特に一九五〇年代に作られた歌詞をベースにすると三木鶏郎の時代のめぐり

方がよくわかる。

〈どなたになにを〉は三木の作曲で歌詞は三木の作品ではないが掲げて置く。

〈どなたになにを〉

ゆうべミミズの 泣く声きいた あれはケラだよ オケラだよ  
オケラなぜ泣く アンヨが寒い 足袋がないから 泣くんだよ  
オケラにあげよか 福助足袋を コハゼが光るよ チョトごらん

〈ミツワ石鹼テーマソング〉

ワワワ輪が三つ ワワワ輪が三つ ミツワミツワミツワ石鹼

〈花王石鹼の歌〉

あごのしゃくれたお月様 お風呂の窓からのぞいている  
パパと一語に お湯の中  
手拭いべろんこ プンプクリン  
うぶ湯の時から みんな花王  
花王石鹼 花王石鹼

〈明るいナシヨナル〉

明るいナシヨナル 明るいナシヨナル みんな家中電気であうごく  
明るいナシヨナル 明るいナシヨナル ラジオ テレビ  
なんでもナシヨナル

〈かーんかーんカネボウ〉

かーんかーん カネボウ かーんかーん カネボウ  
赤ちゃんの時から カネボウ毛糸

## 〈キリンキリン〉

パパはビールでいつでも陽気　ゆうべの一本　今朝までごきげん  
冗談とばして　ネクタイしめて　会社へ出かける　明るい日

キリンキリンキリンキリン　家中でみんなキリンキリン

## 〈バヤリースは夢の味〉

みんなでハイキング　ノンキに歩きや

道に迷って　ノビちゃって　くたびれ儲け

「そこでバヤリースー」　バ・バ　バヤリース

バ・バ　バヤリース　夢の味　バ・バ　バヤリース

## 〈緑の小箱〉

私の姉さん　嫁ぐ日に　きれいな長い　髪の毛を

梳かした　古い鏡台に　ポツンと残した　小さい箱

緑の小箱は　加美乃素

## 〈牛乳石鹸の歌〉

牧場の牡牛がいったとき　かげろう燃えてる　春の日に

ちよいと昼寝の目をさまして　赤ちゃん子牛がキスしてた

花の香り　お乳の泡立ち　牛乳石鹸　良い石鹸

## 〈シャンシャンオーシャン波の上〉

島は砂浜　ヤシの実を　猿がねらって　よじ登る

食べた帰りは　スベリ台　海に落ちたら　ヤシの船

シャンシャンオーシャン波の上

シャンシャンオーシャン揺られてく

## 〈ルルの歌〉

ルルルル　かわいいルル　ルルと唄えば　楽しいね

寒い真冬の　空だつて　ルルとひびけば　楽しいね

ハクシヨン　ハクシヨン　ハクシヨン　そら風邪だ！

クシャミ3回　ルル3錠

## 〈グリコアーモンドチョココレートのうた〉

グリコアーモンドチョココレート

ずらり並んだ　ハダカン坊

粒のそろった　アーモンド

おべべは甘い　チョココレート

グリコアーモンドチョココレート

十二曲のコマソンを聞くと懐かしさだけでなく、歌詞を読めば、あの情景が浮かび上がってくる。三木鶏郎の作詩には、明るさと、優しさ、豊かさ、家族団欒と、希望に溢れた世界が広がっている。現実にはありえない世界が延々と続く。劇場や映画の世界が虚構だといわれ、テレビ草創の時に、そのまま虚構を持ち込んだ。テレビのスポンサーは、嘘ではないが近い夢に向かって、こぞって三木にコマソンを依頼した。

テレビは媒介する機械だから、テレビを通して大衆の心に訴えた。大衆に訴えたものは、〈アメリカがもつ豊かさ〉にほかならない。企業が求めたものは、技術・デザインなどが欧米諸国に追隨できる品質である。その後ろに、何千万人の購買者が控えており、三木は必死に

なって、企業や購買者が求める、優れた製品を提供できるであろう豊かさの夢を創った。

福助足袋のコマソンでは、オケラを主人公にして、オケラが鳴くのは〈オケラなぜ泣く〉に置き換え、可愛らしさと足が寒い事実を訴え、寒さを解消する方法は、福助足袋が一番であることを印象づける。寒い足に足袋を着装することにより身を守り、緩やかな幸福が得られることを暗示している。この詞だけがサトウハチロー作品で、残りの詞は、すべて三木鶏郎の作詞である。

ミツワ石鹸は、輪が寄り添うことで家庭内の幸福および明るさなどを内示し、軽快なメロディーが後押ししている。

花王石鹸は、内風呂をテーマにしている。当時、内風呂も少なかった時代に、〈内風呂〉自体が〈豊かさの象徴〉であったし、〈パパと一諸にお湯の中〉の一節は、家庭が平和で幸福であることを示している。

松下電器はナショナルで親しまれている。まだ三種の神器が訪れる前に〈明るいナショナル〉のアップテンポのメロディーに、近い将来は、家中家電で埋まる事を予言してやまなかった。このコマソンが制作された時代は、アメリカの生活と日本では数十年の格差がある中、多くの家電を購入して、豊かな生活を提唱する松下電器の姿勢を感じるコマソンでもあった。

極めつけは、カネボウ毛糸だろう。多くの視聴者が見た心温まる画像が脳裏に残っていることだろう。鐘とゆりかごに乗せられた赤ちゃん

の印象は、日本で誕生した赤ちゃんのイメージと異質のものである。あの画像は欧米的だったし、毛糸も柔らかく温もりのあるイメージは、日本文化ではなかった。欧米直輸入の文化を受取ることになるのだが、このコマソンが成功したのは、単純な歌詞と人の心に浸透させたメロディーだといえる。

〈パパはビールでいつでも陽気〉〈家中でみんな〉幸せな家庭像を演出する三木にとつて、ビールは、家庭で飲んでこそ幸せなイメージを構築できる。更に、家族全員でジュース類を飲む姿を連想すれば作詞者のイメージどおりである。外で飲む姿は、反対に映る。

当時のバヤリースオレンジは高級品だった。ラムネ一本が十円、サイダーが十五円〜二十五円だった。ミカン水が五円。一日の小遣いが五円か十円の時代にバヤリースオレンジは八十円もしていた。いつでも飲めるジュースではなかった。だから三木は、夢の味とした。特別な日に飲む飲み物として、誕生日やハイキングなどで口にする事ができる。コマソンのタイトルどおり、〈バヤリースは夢の味〉として、まだ貧しい日本に高級品の概念は不用だからこそ〈夢の味〉としたのである。

〈緑の小箱〉は加美乃素本舗の製品であるが、この歌は、叙情的で美しい旋律が耳奥にとどまっている。古い日本のある時代を歌詞にした。新しい時代の寵児として、常に前を見ていた三木には、異質で変わった作品である。

〈牛乳石鹸の歌〉は、うらかな春の日に、甘い花の香りがあたり

一面を覆っている。生まれた子牛が母牛にキスをしていた。このような情景の歌詞だと思う。平和な牧場・春の陽射し・子牛と母牛の触れ合いを、そのまま人間関係に置き換えると、母親が我が子に乳房を与える光景は微笑ましく感じる。この光景は、家族の平和や幸福を内包しているようにも理解できる。

《シャンシャンオーシャン波の上》は、ヤシの実を食べた猿なのに現実感がしない。それは、《食べた帰りは スベリ台 海に落ちたらヤシの船》のように遊戯に仮託したからである。遊戯から想像できるのは、側に両親がいるかもしれないし。巨大な猿島を望遠鏡で見ているかもしれない。やはり幼子の遊びを親が黙って見守っている温かさを感じる。

《ルルの歌》は、《かわいい》《楽しいね》これらの言葉は、風邪薬の歌なのに子どもをあやしているように聴こえる。《そら風邪だ!》この表現も怖い風邪を連想させない言葉である。親が子どもに注意を促す、優しく呼びかけているようにとれる。ここにも深い愛を感じる。

グリコアーモンドチョコレートの一粒を手にとると、つるりとした感触から《ハダカン坊》といい、アーモンドの外側はチョコレートで覆われている。覆っているチョコレートを《おべべは甘い》と表現する。《ハダカン坊》も《おべべは甘い》、二つの幼児語は、おばあさんと孫との会話としても捉えられる。この会話から可愛い可愛い孫の愛情として受けとれる。

三木は、家族・愛・幸福・希望を人生の基本概念に拵え、戦後日本のテレビ界にコマソンを通して豊かで平和な夢を発信していた。

## 二 「兼高かおる 世界の旅」の場合

大阪では、日曜の午前十時から三十分の放映で、昭和三十四年に放送が始まった。番組のスポンサーは、今はないが、パンアメリカン航空で、バックに流れる曲は有名な「八十日間世界一周」である。視聴者が見知らぬ世界へ、私たちの心を駆り立てる。レポーターは兼高かおる、聞き役が故芥川隆行、二人の軽妙な掛け合いは絶妙だった。放送当初は「兼高かおる 世界飛び歩き」であったが、昭和三十五年九月二十日からタイトルは、「兼高かおる 世界の旅」になった。

海外旅行が夢の時代に、世界の街角で道に行き交う人々と会話を楽しみ、親しくなった人の家にお邪魔をする。名の知られた画家のダリヤケネディ大統領など有名人が画面に登場する。兼高自身が民族衣装を身にまとったり、日本語・英語・フランス語・スペイン語の四ヶ国語を喋る兼高は、新しく知り合った人といとも簡単に友達になり、一緒に遊ぶ。そこが、日本人のあこがれと好奇心をかきたてた。

兼高は一九二八年神戸市で生まれ、香蘭女学校を卒業後、一九五四年単身渡米し、ロスアンゼルス市立大学ビジネス科に学んだ。一九五八年には、世界早廻り飛行新記録を樹立した。

食べ物に目のない兼高は、北欧のアイスクリームを食べてむやみに美味しいという。アイスクリームを片手に持ち、公園をブラブラして

いる顔は三十歳を過ぎた女性に見えないあどけなさを持ち合わせていた。

兼高は自著で、食べ物を紹介しているが印象に残った話しを書き出してみよう。

オランダのチーズ市の話も面白いが、世界に名高い中国料理の珍珠の話の方が凄味がある。

生きた猿の脳みそは珍珠といわれている。食べ方が凄いい、各自のテーブルの席に小さな穴があり、猿がそこから首を出してキョロキョロしているのを、横に置いてある金槌で猿の脳天めがけて一撃を加える。脳天をたたき割り、スプーンで小さな脳みそを食べる。

はつかねずみの溺死体料理も高価で珍珠と伝えられている。養殖のネズミが美しい籠に入れられ、ピンクがかかった白い子ネズミの尾っぽを掴み、バタバタしているネズミを蜜のつぼに入れ、お腹が一杯、耳の穴も鼻の穴も蜜で一杯になり昇天する。口に入れてかむとへちゅつと蜜が出て口内に当る。つまり触感を楽しむ料理なのである。

一番不気味な食べ物は、猫の目玉である。生きた猫の目玉に竹筒を突っ込むと目が竹筒を通ってところろと落ちてくる。これを新鮮なうちに飲み込むそうである。この話はこれで終わらない。伝聞によるとある地方には片目の猫がうろうろしている、という。両目を取ってしまわないのが人間のお慈悲らしい。

世界のカレー事情も様々で、学生時代の兼高がアメリカにいる頃、友人とカレーを食べに行き、さんざん待たされた後、デコレーション

豊かなカレー一式が出てきた。味は砂糖がきいていてカレーというより、まるであんこ御飯だった。この時、アメリカのカレーの味が最低であったことを述懐していた。

インドのマトン・カレーは、その日の祭壇で生け贄にされ殺された。浄く神聖なる羊を食べさせられたが、カレー自体があっさりした辛さで、日本的なコクのある美味しさはどこにも発見できなかった。

兼高がおるが食べたカレーで、一番美味しかったのは、アフリカのナイロビだという。特徴は皿数が豊富で、美味しく、早く持つてくる。この店のカレーは赤く、豚はない、鳥・エビ・野菜の他、牛の挽肉をボールにしたカレーがあつて、全種類を各自好きなものを取り分けた。カレーは別のスープ皿に入れ、他に生の玉葱のみじん切り、人参のスライス、トマトときゅうりのさいの目切り、砕いたピーナツ、インドの漬け物、さいの目切りのパイヤ、バナナの輪切りを好きなだけカレーに入れて混ぜる。

兼高がおるは好奇心旺盛な女性で、このようにどこの国へ行っても、その国の食べ物を食す。辺境や辺鄙などのような場所へ出かけていくし、その地の衣装を身に付けたり、音楽を聴き、その地に入ればその地の文化を大切にす。また、パラシュートを楽しみ、ラップ人にトナカイの肉の切り方を教わる。彼女の凄さは、気球でアルプス越えなど数々の冒険に挑み、冒険家顔負けの行動をして周囲の度肝をぬいだことだった。

ダリは容易に訪問客を受け付けけないという噂が流布していた。兼高

がどのような方法を用いたのか不明だが、約束より五時間遅れだがダリと会った。

アメリカのホワイトハウスでの出来事として、大統領と非公式に会うことを考えていた。

大統領は着物の兼高を見て奇異に感じたらしい、大勢のカメラマンと並んで兼高が十六ミリカメラをかまえていると、大統領が声をかけ、「それは日本のカメラですか？」といったように聞えた。兼高がベル・アンド・ハウエルですと答えると大統領は笑って頷いた。後で他の記者の話では「貴女は日本のカメラマンですか」ときいたらしい。

このように誰と会おうと有名人がいても、物怖じしない姿こそ兼高かおるの本当の姿なのである。

画面に映し出された彼女は美しかった。父はインド系だから、兼高かおるの顔も彫りが深く、エキゾチックな顔に好感を持たれた視聴者も多いはずである。その上、語学を自由に操り、米欧に対して劣等意識を持つ我々から見ると、対等に話す兼高かおるに尊敬の念を抱くのも仕方がない。そんな彼女を見ながら、語学を勉強しようと考えた人、海外の国に憧れ商社員に希望を持った人、外国人の異性をパートナーに選択しようと思った人たちは、「兼高かおる 世界の旅」の影響を受けた人々といつてよい。

### 三 アメリカ家庭劇の場合

「うちのママは世界一」と「パパは何でも知っている」。

一九五〇年代のアメリカの中流家庭を舞台に、物わかりのよい父親が、一家のトラブルを解決していく。何でも知っているパパと、素直なママ、このような家庭に誕生していたら、きっと私の人生も変わっていったと、認識する。日本のホームドラマの家庭像に大きな影響を与えた。理想の家庭と大家族の日本との落差は埋めようがなく、憧憬として心の奥底に沈めた人が多いのもやむをえない。

この番組の放送が一九五八年（昭和三十三年）八月から一九六四年（昭和三十九年）三月まで日本テレビで放送された。昭和三十三年はご成婚の一年前、テレビの受像契約者が百万件を突破し更に増加傾向にあった。高度経済成長にさしかかった頃でもあるが、まだまだ貧しさが社会を覆っていた。

大阪の天王寺界限には戦病者や乞食が多かったし、長柄川の土手にも戦病者や乞食とみられる人が掘っ立て小屋にすみついていた。戎橋・心齋橋・日本橋にも同様の人々がアコーディオンを弾いたり、座ってお辞儀をしながら通行の人から施しを受けていた。この時代にアメリカの豊かな生活を垣間見て憧れた人は、多かった筈である。父親をパパと呼び、母親をママと呼ぶ子供がいて、そんなに多くはいなかったが、それ以後アメリカ風の様式が日本社会に抵抗なく根付き、受容されていった。

「うちのママは世界一」は「パパは何でも知っている」の女性版で



ある。主演のママ役が、往年の美人女優であるドナ・リードが扮していた。ドナ・リードは、優しくマリア様のようにも見て取れる。いつでも子供達に優しく厳しいが親としての深遠さがある。この時期のアメリカのサラリーマンは、一定の年収もあり、休みもあり、家族で触れあう時間もたくさんあった。

当時の日本社会とは比較にならなかった。その頃の日本社会は、この親も子供に係われない忙しさであった。自営業が多かった私たちの町では、子供が家業を手伝うのは当たり前だった。ちょっとした仕事は、子供の仕事とっていいくらいである。

誰もが感じ思っていたのは、物わりの良い父親や優しい母親の姿など日本社会には存在しなかったことである。

大家族から核家族への移行期で、夫婦中心の家庭が拡がりつつあった。この時代にアメリカテレビから影響を受けた少年・少女は、いつかアメリカ製品を生活の中に置き、夫婦で共通の趣味を持ち、夫婦であっても、それぞれの個を大切に、個の自由を守り、相手をおもいやる心を持つとと考えていた。しかし、四十数年経過した現在、夫婦平等の自由はなく、夫は自由に振る舞うが妻には、外出を規制したり、門限を決めたり、酒を飲む時間まで制限し、あげくの果てに妻に対して暴力を振るう男の現実を見れば、社会においても家庭においても、〈平等〉〈対等〉など現実的な意味では確保されていなかったし、思想化されなかった。アメリカ中流家庭のドラマを対象化できず、ドラマとして受け流してしまった事に個としての限界があった。

#### 四 西部劇の場合 「ブロンコ」「ローハイド」「拳銃無宿」

私たちの中学生時代に西部劇が流行っていた。表題以外にも「ボナベンザ」、「シャイアン」、「ララミー牧場」など多くの西部劇が放映されていた。学校での会話は、ローハイドの歌がいいとか、ステイブ・マックインの持つM92ウインチェスター・カービンの銃身を短く切った特別の銃が格好いいとか、ブロンコのタイ・ハーディンは男前だ、といった会話を休憩時間に行っていた。ボナンザやシャイアンなど、昨日の番組内容も話し合ったり、これらのテレビ番組を見ているかどうかといった、このような他愛もない話を連日のようにしていた。

西部劇を見ない女性でもローハイドの主題歌は知っている。フランキー・レーンのダイナミックな歌声と鞭の音、テキサスから最寄りの駅まで千キロ以上の道のりを三千頭の牛に牧草を食べさせ牛を太らせながら旅をする。カウボーイ仲間のいざこざや、インディアンの襲撃に対して迎撃し、強盗に対しても戦わなければならない。日照りや砂嵐・雷雨の自然条件を克服し、三カ月から四カ月をかけて牛を移動させる。埃や汗にまみれた衣服にはカウボーイの生活を感じるし、アメリカの広さを感じざるを得なかった。

西部劇でもう一つ忘れることのできないのが「拳銃無宿」である。中学生時代で気に入っていたのが、ブロンコと拳銃無宿である。ブロンコのスポンサーは忘れたが、お気に入りのタイ・ハーディンのプロ

マイドがあり、同様に拳銃無宿のスポンサーが岡三証券で、プロマイドを申込み、永らくわが家の整理箱にあつた。正義感の強いジョッシュ・ランダルは、賞金首のかかったお尋ね者を殺さず生け捕りにすることを心掛け、護送中、相手に同情し、信用した為に裏切られることになる。捕まえたお尋ね者が無実を訴え、お尋ね者の無実を証明して、真犯人を捕まえることもある。悪党仲間や他の賞金稼ぎから獲物を狙われることもあり、サスペンスに溢れていた。

賞金稼ぎは人生の裏街道を歩くいわば負け犬である。保安官・悪人・住人達は、ジョッシュ・ランダルの反対側の存在であり、逃亡犯人を掴まえ殺して賞金を受取る生活に白い目でみている。ジョッシュ・ランダルの暗さ、世間から孤立していても、目的を果たす生き方に共鳴したのだろう。

思春期が終るか終らない頃には、何か一つ引かかる感情や感覚が直ぐに受容できるのが特徴だし、毎日毎日負を自己に背負い込み、物語の主人公に同化させ、心の負が大きくなるにつれ心の防御も強くなっていく。

孤立していくような不安を感じる心的世界には、ジョッシュ・ランダルの気持ちと重ね合わせたり、ドラマの主人公の心的世界とも同一化しようとする。

残酷・残虐なシーンもあり、従来の番組にはない新鮮さも手伝って、中学生の心を占領していた。

## 五 マルマン深夜劇場の場合

昭和三十七年に深夜放送が始まり、「夜は恋人」のバックミュージックにのって始まる。新東宝の作品が多かったようだが、万里昌代や三原葉子が多くの作品に登場していた。グラマーで、陰のある類型的な感じが、異次元の女性を感じさせ、見る者の心に刺激を与えた。

大映・東映・松竹・東宝・日活・新東宝の六社協定がある中、昭和三十七年に深夜放送が始まり、新東宝の映画を見る事ができた。昭和三十一年のテレビ放送時間は午前と夜間のみで、昼間は放送していなかった。この年の番組を、朝日新聞縮刷版から見ている<sup>4)</sup>。

昭和三十一年一月五日

NHK 一時「煎茶の話」

六時子供劇「泣

き虫ごころ」

日本テレビ 一時四十五分「きもの随想」

六時「飛行機は

如何に飛ぶか」

KRテレビ 十二時四十分劇映画「極楽六花撰」 五時四十分漫画

映画「小人と青虫」

同年 一月六日

NHK 一時五十分「全国大学サッカー」 六時「スキートの

たのしさ」

日本テレビ 十二時四十五分「初夢の医学」 六時「今年も仲

良し」

KRテレビ 一時「火口を越え雪嶺の彼方」 五時四十分「映

## 「画予告編」

当時は映画・舞台中継など特別な放映以外の番組制作時間は、三十分だから、一月五日のNHKでは「煎茶の話」を一時三十分には終了している。日本テレビの「きもの随想」も二時十五分には終わっている。KRテレビでも九十分間の放映として、二時十分には終わっている。一月六日も同様で、NHKは三時二十分、日本テレビの「初夢の医学」もドキュメンタリー番組としても三時四十五分には終わる。KRテレビもドキュメンタリー番組としても二時に終わるから、四時間半から二時間四十分ぐらいは放送しなかった事になる。

僅か五年の間に昼間を含めて深夜にまで放送が及んできた。テレビ放送が始まって十年だが、当初はアメリカテレビ界の真似や輸入に頼っていたことを考えると、経営が苦しい新東宝から旧作映画を購入したのである。このため、六社協定は破棄され、五社協定となったが、これを機会に映画人がテレビに参入するようになった。新東宝の作品が多いのは、このためである。

新東宝のなりたちは、東宝で労働争議が続いている最中に有志が、同社の制作子会社が母体になり、昭和二十二年に設立された。東宝から有名な俳優・監督が移籍して独立の映画制作・配給会社となる。以後、文芸作品を制作するが不採算が続いていく。大蔵貢が新東宝の社長に迎えられるが、新東宝を買収し、(エログロ)路線をとった。当初は興行収入も増え、赤字も改善した。しかし、大蔵のワンマン体質

が悪く、再び東宝の傘下に入り、大蔵は追放されることになった。折しもテレビ業界と競合中、再建策も実らず昭和三十六年に倒産する。<sup>5)</sup>

倒産直前に大量の作品がテレビ局に売却された。昭和三十七年に深夜放送が開始される迄は、日中の時間帯に放送されていた。昭和三十二年以前のテレビ番組には、昼間は放送していなかったが、昭和三十三年・三十四年には昼間の放送をいかなかった。

私の知っている俳優で男優は、菅原文太・丹波哲郎・宇津井健・高島忠夫・天知茂・中山昭二・江見俊太郎・沼田曜一、女優では、池内淳子・大空真弓・三ツ矢歌子・久保菜穂子・高倉みゆき・万里昌代・三原葉子・宇治みさ子・北沢典子などがいた。

父親が新東宝の株を持っていたこともあり、株主招待券を活用して「明治天皇と日露大戦争」を見に行った覚えがある。確か明治天皇役は嵐寛寿郎だった。昭和三十二年公開だから、私は小学校四年生であつた。当時の記憶も定かではないが、単なる戦争映画ではなく、理屈があつたように思う。二〇三高地を攻めるための会議で多くの犠牲者が出る可能性を示唆していた。乃木将軍も息子を失っているにもかかわらず、戦争に勝つても多大の戦死者を出したため、人々から殺人者よ、人殺しなどと陰口をたたかれたシーンは、死者に対して抗弁しない乃木将軍の姿が印象的だった。戦争終了後、水師営でステッセル将軍と会見のため、乃木司令官が到着して馬上から下りる場面は平和を感じさせた。

マルマン深夜劇場で知り得た女優は、万里昌代と三原葉子である。

万里昌代のイメージは強烈だった。柔道初段とモダンバレエで鍛えた体からのアクションシーンもよかったが、野に咲く一輪の花といった感じで、現実には存在しない女性、物語の世界から切り抜いたような女性だった。別ないい方をすると、グラマーで、陰のある類魔的な感じが感受性の強い人に受容されたような気がする。深夜劇場でよく見たのに、彼女の代表作がない。ストーリーより〈万里昌代〉しか見えないことになる。

大映に入社後、大映映画に出演する。見た作品は次の五本である。

昭和三十七年は「座頭市物語」でのおたね役、昭和三十七年の「新悪名」に出演した時はお雪、昭和三十七年の「新座頭市物語」では再びおたね役、昭和三十八年の「囁く死美人」の丹羽不二子役、昭和三十八年の「座頭市凶状旅」では三度おたねを演じた。これらの映画は何度も見ていた筈なのに、彼女の印象はない。ただ「新悪名」のお雪役には、活動的な側面が出ていたように思う。

三原葉子につけられた代名詞がグラマーでエロティシズムをもつ、画面から漂ってくる不思議な女優である。川本三郎は面白いことをいっていた。<sup>6)</sup> 日活の筑波久子はいいところのお嬢さんのエロティシズム、遊びのエロティシズムでしかない。しかし、三原葉子は違っていた。彼女の出る映画は、たいいてい、町のうらぶれたキャバレーとかクラブとか売春宿が舞台である。彼女は、生活の匂いのする、懐かしいエロティシズムである。三原葉子と万里昌代の共通する点を述べたが、一つ付け加えるなら、手が届きそうで入手できないエロティシズ

ムといえる。

毎晩、眠たい目をこすりながら、目を凝らしてテレビ画面に釘付けだった。無為に時間を過ごしたかのように思えるが、彼女たちが出演するかどうかの主たる関心事で、ブラウン管を見つめ、出演者に名前があれば見ることになる。名前がなければ見ない。憧れだけがテレビの世界へ誘われたことになる。まるで誘惑され誘拐されている気分になる。テレビ画面の三原葉子と万里昌代の姿を見ていると、演技力があって、視聴者をテレビドラマの世界へと引きずり込む訳でもない。そうかといって飽きがくる訳でもない。

テレビ画面から放散される色香を受け止め、彼女たちをブラウン管上の〈恋人〉として頭の隅に匿ってしまった。

## 六 昭和三十年代のテレビ放送の場合

今となつては、家で見た映像なのか、それとも風呂屋で見入っていたのか判断がつかない。

昭和三十年に「日真名氏飛び出す」の主人公日真名進介がさまざまな事件を解決するのだが、日真名という名前が珍しかったのと、写真のフラッシュのあと、「日真名氏飛び出す」の文字が画面に映し出された。「私の秘密」は高橋圭三の司会で〈事實は小説より奇なりと申しまして〉の名文句で始まるクイズ番組。なかなか当たらないところに面白さが隠されている。

昭和三十一年「ハイウェイ・パトロール」「スーパーマン」「名犬リ

ンチンチン」「チロリン村とクルミの木」、日本に高速道路がない時代での話。車に興味のない人には実感が湧かなかったと思うが、スピード感とスリルが視聴者に新鮮な快感を与えたと思う。「名犬リンチンチン」は子供騙しのようなストーリーで好感が持てなかった。一番見たのは断然「スーパーマン」である。「月光仮面」も「スーパーマン」も強いし、危機一髪の時にどこからともなく現れ、悪人をやっつける映像がすっきりした印象を与えた。

昭和三十二年には、「ダイヤル110番」を思い出す。劇中必ず「ハイこちら110番」の名台詞も忘れることはできない。「アニーよ銃をとれ」の印象的なシーンは、美貌の早撃ちの名手、アニーが荒くれ男を相手に、目にもとまらぬガンさばきで相手の拳銃を打ち落とす場面は爽快だった。「アイ・ラブ・ルーシー」のルーシーは明るく、コミカルでバイタリティーのあるホームコメディだった。ルーシーの一つのポーズを忘れない。びっくりしたときの動作が、口を大きく開け、手を広げ、足を開き、目もびっくりするほど大きくし、瞬きもせずに動きを停止させている姿が、視聴者に笑いを与えた。

昭和三十三年には、「ロツテ歌のアルバム」が始まった。司会の玉置宏が「一週間のご無沙汰です」の名調子で歌手を称え、司会者は脇役であることを徹底的に演じた人だった。NHKの「事件記者」も放送されたが、小学生にとっては暗い感じに映り、あまり見なかったように思う。同じくNHKの「バス通り裏」も見なかった。十朱幸代の名前は知っていたが、やはり小学生には面白いと感じなかった。この

年の最大のヒット作品は「月光仮面」である。(どここの誰かは知らないけれど 誰もがみんな知っている…)の主題歌が流れ、オートバイにまたがり白いコスチュームのいでたちで、二丁拳銃から白煙が上がる姿に子供達は大喜びしたものだ。この時始めて大瀬康一の名前を知り、引き続き大瀬康一主演の「隠密剣士」を見た。この頃話題になったシーンが手裏剣を投げる動作を、手真似で遊んだものである。ここで忍者役の牧冬吉も知ることになった。

昭和三十四年「兼高かおる 世界飛び歩き」「スター千一夜」「番頭はんと丁稚どん」「ローハイド」「拳銃無宿」。

「スター千一夜」は関西テレビで、午後九時から九時十五分までの十五分間の放送時間だった。好きな俳優やスポーツ選手が出演している場合はよく見た。「番頭はんと丁稚どん」もよく見た。小学生の感性からすると、大村崑演じる丁稚の〈悲哀〉を感じたのかも知れない。「ローハイド」はあまり見なかったが、学校での評判は上々だった。フランキー・レーンが歌う主題歌も格好よかったのだろう。「拳銃無宿」については、プロマイドを持っていた程だから、相当いかれていたと思う。弱者を助けるジョッシュ・ランダルは、ライフを半分に切ったランダル銃が魅力的で、賞金稼ぎのスタイルも若い私たちの心を攪拌した。思春期には感情の歪みや暴力などを受容しやすい精神状態になっているから好きになるのも仕方ないことだった。

「皇太子結婚式・中継」は、戦後日本のテレビ受像器を大幅に増加した要因の一つである。NHKと民放テレビ各局は、放送が始まって

以来の中継体制を組んだ。皇居・賢所での結婚の儀と皇居から渋谷・常磐松の東京仮御所までの結婚パレードを中継した。馬車によるパレードの中継は、沿道にテレビカメラ移動用の特設レールを敷き、ヘリコプターが空からカバーした。

正田美智子さんが民間の出身で、ミッチーブームが起り、テレビでパレードを見ようと、テレビ受信機が爆発的に売れた。テレビの受信契約数は、前年五月に百万件をこえたが、この結婚式の二週間前には、一挙に二百万件を突破した。

昭和三十五年、少年探偵団以降児童冒険のドラマが続き、主題歌は三橋美智也が「怪傑ハリマオ」を歌い、変った所では、松山容子の変装と立ち回りが魅力だった「琴姫七変化」。「ララミー牧場」「ボナンザ」「ライフルマン」「シャイアン」などの西部劇は、中学生の話題の中心だった。洪いところで「サンセット77」のファンもいた。政治に関心のある中学生なら、新聞やテレビから情報を収集していた。しかし、いかんせん中学生では、「安保報道」を総体として理解はできず、当然のことながら政治問題としても把握できなかつた。デモに参加して亡くなった東大生の樺美智子は、判然としないまま悲劇のヒロインとなり、名前だけが頭にこびりつくことになった。

昭和三十六年、窓が開くと中嶋弘子が頭を横に傾けて挨拶する姿が印象に残っている。美しい女性、日本人らしさのない女性が司会を務め、「夢で逢いましょう」は歌と踊りとコントでつなぎ若い人の気持ちを掴んだ。「シャボン玉ホリデー」はザ・ピーナッツとクレージー

キャッツのレギュラー陣にゲストを迎えてのバラエティー番組。面白かったのは、コントの中に植木等が横から割り込み、皆に睨み付けられ、〈お呼びでない〉といいながら退く場面はストーリーが分かっているにも愉快だった。最後にスターダストの曲が哀愁を誘い、視聴者の頭にはアメリカの香りを感じさせたかも知れない。

「若い季節」には、大物タレント・俳優といわれている人が大勢出演していた。淡路恵子、有島一郎、水谷良重、沢村貞子、黒柳徹子、横山道代、坂本九、ダニー飯田とパラダイスキング、ハナ肇とクレージーキャッツ、森光子、ジェリー藤尾など豪華な顔ぶれである。東京銀座のプランタン化粧品会社を舞台にしている。黒柳徹子と横山道代の早口で喋るのも見所の一つであったし、主題歌も若さに溢れていた〈ワーオ ワーオ お腹の底からワーオ 若い力が…〉。

「スチャラカ社員」は、上方漫才タレントと藤田まこと、白木みのるに加えて女優の卵の藤純子も出演していた。藤純子に好意を抱く藤田まことの台詞、〈藤クーン〉も流行した。「青年の樹」は月曜日に放映され、勝呂誉、寺島達夫、大空真弓らが戦後の若者の考え方やライフスタイルを描いていた。「咲子さんちよつと」のオープニングは〈咲子さん 咲子さん 咲子さんちよつと来て〉で始まったような気がする。サザエさんの家庭は三世代だが、咲子さんの家庭は二世代、すでに家庭崩壊が始り、その状況下で古き良き時代のしきたりを守る姿が共感と郷愁を得た。嫁は江利チエミ、夫役は小泉博、両親には伊志井寛と葦原邦子の配役だった。

三橋美智也が歌う主題歌「新選組始末記」は、近藤勇役の中村竹弥が渋い演技をしていたし、戸浦六宏の好演も好評の要因だった。「七人の刑事」は、犯罪者の人間性を描き、犯罪の社会的な意味や、社会の不条理を考えさせられた。中学生にとつては、重たい番組だった。両親が見ていたから、横で見えていたのだが、しんどい番組だった。早熟の中学生なら、「社会」や「不条理」が知識として処理できるのだが、一般の中学生ではよくわからないまま時間だけが過ぎ去った。

昭和三十七年には、トニー谷の司会で番組が始まった。「アベック歌合戦」は決して品のいい番組ではなかったが、トニー谷がツイストしながら踊り算盤を片手に、時には右手で珠を弾きながら動くさまは、芸を感じざるを得なかった。「ホイホイ・ミュージック・スクール」「隠密剣士」「ベン・ケーシー」「ルート66」などは伝説の番組である。「てなもんや三度笠」は、藤田まことの出世作、視聴率が六十パーセントを超えたこともある。一番有名だったのは、番組のオープニングに行われる生CM（俺がこんなに強いのも、あたり前田のクッッカー）が一世を風靡して大人気になった。この年にテレビ受像器が千万台を突破した。

昭和三十八年、まだハワイが遠い夢の国であり、日本人にとつても憧れの島だった。「アップダウンクイズ」は、十問正解するとハワイ旅行に行ける。間違うと一番下まで落ちる。小池清の司会もさわやか、問題を読むのはアナウンサーの佐々木美絵。彼女は優しい口調でゆっくりと問題を読んでいた。「がっちり買いましょー」は、夢路い

とし・喜味こいしの司会進行で、ゲームにより三組が五万円コース、七万円コース、十万円コースにわかれ、二分間の制限時間で規定の商品数と金額内なら選んだ商品が貰える仕組みになっている。

三十分番組の「野生の王国」は、様々な動物の生態と自然破壊の記録をテーマに掲げていた。「夫婦善哉」は、ミヤコ蝶々と南都雄二の司会による視聴者参加番組で、出演する夫婦の話をうまく引き出し、視聴者の共感を得た。「底抜け脱線ゲーム」は、金原二郎司会で底抜けチームと脱線チームに分かれ、奇抜なゲームに取り組んでいた。未だに忘れることのできないゲームとして、鉛筆の上に十円硬貨を七枚乗せる場面は、見ていてハラハラするし、自分でやってみてもうまくいかなかった。

「凶々しい奴」は、なんの取り柄もない男だが、凶々しいが憎めない性格を生かしながら、のし上がり成功する話である。極めて大阪的なドラマが時代とマッチした。「三匹の侍」の特徴は、効果音が優れていた。刀と刀の打ち合う音や人を切る音など、立ち回りがスピーディーでリアリティがあった。

「鉄腕アトム」「鉄人28号」は月刊雑誌の「少年」に連載されていた。漫画ファンなら誰でも知っていた。アニメ化一号二号と記念すべき時に、多くの漫画ファンが待ち望み、期待を裏切らなかつた。その後、日本がアニメ大国になる礎を築いた。「エイトマン」は見なかつた。この年にテレビ受信契約が千五百万台を突破した。

「ケネディ大統領暗殺・宇宙中継」は、忘れることのできない国際

的な事件で、遊説の為、テキサス州ダラス市内をオープンカーで移動中に狙撃された。犯人とされたオズワルドも二日後に射殺された。裏話として、東京オリンピックのテレビ中継にそなえて通信衛星による日米宇宙中継の実験をNHKが行っており、この中継実現に力をついたケネディ大統領の挨拶が送られることになっていた。実際は、皮肉にも当人の非業の死がニュースとなって日本に送られる結果となった。

昭和三十九年度、印象の強かった作品中三点だけ選ぶ。荒廃している時代に見た「逃亡者」は、妻を殺害され嫌疑をかけられた小児科医師のリチャード・キンブルが真犯人の片腕の男を追う執念。ジェラード警部に追われ、追いつめられる場面にハラハラ、ドキドキの連続で、その最中に病人を看護する姿に感動を覚えた人も多い筈である。

東京オリンピックはアジアで行われた初めてのオリンピック、戦前日本で開催予定だったが戦争のため中止になった。戦後復興のシンボルだったのが「東京オリンピック中継」だった。開会式の視聴率が八十パーセントを超え、東洋の魔女の渾名をもつ女子バレーボールチームが宿敵ソ連を破った試合は、テレビ前に釘付けになり応援をした。痺れた視聴者も多かったと思う。名花と云われた体操のベラ・チャスラフスカの演技は、スポーツにおける〈美〉を教えてくれた。

芥川也寸志作曲の「赤穂浪士」のテーマ音楽は重厚さがあり、大石内蔵助役の長谷川一夫が鼻にかかった声で〈おのおのがた…〉と呼びかける台詞が巷で流行った。「題名のない音楽会」「ミュージックフェ

ア<sup>64</sup>」「七人の孫」「うず潮」「愛と死を見つめて」などが放送されたが、これらの番組に関心が薄いこともあり、ほとんど見なかった。

昭和三十年以降、多くのテレビ番組を見てきたが、欠くことのできない番組は、スポーツ番組で、阪神―巨人戦と阪神甲子園球場を舞台にした高校野球の観戦である。このふたつの野球番組に特別な思いを寄せる。

プロ野球の阪神―巨人戦とは別に、昭和三十七年には小山・村山で優勝し、東映フライヤーズと日本シリーズで戦い敗れた。昭和三十九年には村山・バッキー両投手の力で優勝し、南海ホークスと戦い、またしても敗北を喫し、念願の日本一になれなかった。

阪神の選手で、捕手の山本が打撃は悪かった。サードは三宅秀史で、ゆっくりバットを出し入れする三宅のフォームは独特だった。シヨートは吉田、セカンドは大根切りの鎌田選手、ファーストは島倉千代子と結婚・離婚した藤本勝巳、レフトは天津、センターは田宮、移籍後並木。巨人には与那嶺、坂崎・広岡・川上がいた。投手の藤田以外に若い長島や王がいた。

高校野球は浪商と法政二高との戦いで熱い視線を送っていた。高田や尾崎がいる浪商と、柴田のいる法政二高との戦いも暑い夏の熱い戦いが若い力に気を注いでくれた。

#### 七 昭和三十年前期の番組表の場合

朝日新聞の縮刷版から昭和三十年から同三十四年の番組表を見なが



ら、テレビ番組欄の小ささに今更ながら驚いた。昭和三十年一月一日のテレビ番組は、NHKテレビと日本テレビの二局しかなかった。お正月らしく十二時三十分から雅楽、一時から新年の挨拶があり、二時から新春漫画映画大会を放映していたが、長くても一時間の上映で、三時で終了する。六時十分まで休憩し、三十分の踊りがあつて、六時四十分からは琴の演奏、七時三十分から寄席の中継をはさみ、八時三十からは人気番組のジェスチャー、その後は九時十分から遊び教室、九時四十分から新春放談があり、遅くとも十一時には終了している。

この年の一月一日から同六日までの放送を調べると、NHKテレビでは、映画「紅孔雀」を一時間半放映している。一月六日のNHKテレビには、午後十二時半よりアカデミー助演女優賞を受賞したナンシー梅木の名前も見えている。日本テレビでは、午後七時半より全日本フライ級、バンナム級タイトルマッチのボクシングが放送された。テレビが生まれて二年目、テレビは放送時間も少ない、これは制作番組が少ないから仕方がなく、ラジオ欄の下に申し訳程度にあつた。

昭和三十一年にはNHKテレビ・日本テレビ・KRテレビの三局になつた。

一月一日のKRテレビには、午後五時三十五分から「サザエさんまつり」、その後六時十分より「スーパーマン大会」が七時まで続いた。一月三日のKRテレビには、午後六時十分から五十分間「雪村いづみショー」があつた。一月四日の日本テレビも人気のあつた「雪村いづみショー」を九時半より三十分間組んでいた。KRテレビでも九

時十分より、トニー谷の「ざんす音頭」を四十分間放送していた。一月五日のNHKテレビは、八時より「私の秘密」があり、ゲストに長谷川一夫を招いていた。

昭和三十二年のテレビ番組は、初めて二欄になり、昼の放送も充実した。

一月三日の各局が放映したタイトルは、NHKが三時五分より「二挺拳銃のジョウ」中村メイコ他、日本テレビは二時半より四時十分迄ラグビーの実況を行なつた。対戦は、「同志社大対早大」、KRテレビは、一時半より劇映画「郡盗の宿」「燃える大陸」人形劇「若返りの泉」、四時より東宝劇場中継「初春宝塚花踊り」、NHKの七時二十五分より九時まで危険信号、私の秘密、ジェスチャーを放送していた。一月五日の日本テレビは、三国一朗の司会により七時半より「なんでもやりまショー」があり、KRテレビでは九時十五分より日真名氏飛び出す「わらべは見たり」を三十分間放送していた。

昭和三十三年のテレビ欄は元に戻つて一欄になつた。一月三日のNHKテレビは、七時十分より「ジェスチャー」、八時十五分よりご存知の「お父さんはお人好し」、花菱アチャコ・浪花千栄子が演じ四十分五分放映されていた。一月五日のKRテレビは、六時十五分から五十分まで「名犬ラッシー」が放映されていた。

昭和三十四年一月一日のKRテレビは、十二時十五分よりこども映画大会として「名犬ラッシー」「スーパーマン」を一時四十五分まで放送した。一月四日の日本テレビは、六時半より七時まで「光子の

窓」を放送していた。出演は草笛光子。藤村有弘・高島忠夫・中村富太郎・中村芳子達であった。同じく八時半よりロバート・ヤング主演の「パパはなんでも知っている」警察からの呼び出しの巻、そして、KRテレビの六時半からは、やりくりアパート「一年の計は」にエンタツ、佐々十郎が出演していた。七時からは子供達が待ち望んでいた「月光仮面」が始まった。一月五日のNHKテレビには、七時十五分より「バス通り裏」が十朱幸代、七時半より「私の秘密」が渡辺紳一郎、藤原あき、藤浦洸、高橋圭三アウンサー、ゲストは長谷川伸である。KRテレビでは、七時の「あんみつ姫」を中原美沙緒、由利徹で演じていた。一月六日のNHKテレビは、七時十五分から「バス通り裏」が始まり、七時半から「ジエスチャー」、八時半から「お笑い三人組」の今年もごひいきに、のテーマで江戸屋猫八というぐらいいだから、猫の物真似は天下第一品である。一竜斎貞鳳、金馬、楠トシエのメンバーでドタバタを繰り返していた。十時二十五分からアイ・ラブ・ルーシー「これがゴルフだ」と人気番組が揃っていた。

日本テレビでは、六時十五分より名犬リンチンチン「とりでへ帰れ」を四十五分まで、八時半より「ダイヤル110番」「松の内異聞」を十朱久雄を出演で人気があった。

テレビ番組の一週間分でも懐かしい番組が登場してくる。一年間の番組を検討すると忘れていた番組を再発見するかも知れない。テレビ番組の内容も政治番組、日本の伝統文化である舞踊や邦楽、劇場中継として歌舞伎や浄瑠璃、新作の舞台中継、レスリング・ボクシング・

ラグビー・野球などのスポーツ中継も取り入れられ、苦心した制作が伝わってくる。

放送時間も少なく、アメリカの映画・テレビ放送劇などを少しずつ輸入し、日本で制作している番組は、技術的未熟さはあるが、心のこもった番組が多かった。現在の番組と比較しても、テレビカメラの映像技術の発展もあつて、風景や動物・人物、水中カメラを使用している海中の生態や宇宙からの地球の撮影は、比較すべきものもないが、劇場中継・自作のドラマには、見る人の心に訴える何かが存在したのは確かである。

スポンサーの問題や衛星放送など多重チャンネルの時代に視聴者にチャンネルの選択肢が生まれたのは良かった。更に番組が多様化し、専門化していく、視聴者の期待に応えられるような番組提供を迫られているのも事実である。

## II 歌から受けたもの

### 一 美空ひばりの場合

美空ひばりが戦後の日本社会で、娯楽のシンボルであったのは事実である。どうして彼女が娯楽のシンボルだったのか。否、美空ひばりが大衆とともに歩んだ人生にこそ、重大な意味があるといえる。歌謡界の〈女王〉と呼ばれ続け、親しい人や熱烈なファンから〈お嬢〉と声がかかる。社会から虐められ、被害意識が過敏になった〈ひばり母

娘)。父親の死、母親の死、さらに弟の死が重なり、孤独を噛みしめながら生きていく。肉親の死亡だけでなく、親しい友人やかけがえのない友を喪失した〈ひばり〉の心境は推し量ることができない。また、弟の不祥事や、母親の言動がマスコミの格好の話題として紙上を賑わせた事など、ひばりを悲しませる事実もあった。社会的には暴力団との交際を指摘され、地方自治体の会場から閉め出され、〈ひばり〉が社会的に葬られようとした。しかし、マスコミに対して過剰な反応を示す態度には理由がある。庶民に受け入れられようと頑張るが、〈事実〉と違う報道が過去からされていたこと。魚屋の娘が〈天才〉〈女王〉〈大金持ち〉などと名声を手中に収めたからで、この人のプライベートに興味を湧くのは仕方ないことだった。

晩年は無理がたたり、〈ひばり〉自身の身体は蝕まれ、入退院を繰り返しながら歌手生命も危ぶむ声が新聞・週刊誌などから囁かれた。それでも幾度となく〈ひばり〉は蘇った。

私達の世代の〈ひばり〉に対する認識はこのようなものだと思う。〈ひばり〉の生涯と歌謡から戦後に光を当てたい。

### ① 歌・歌唱・芸・大衆―美空ひばり

『愛蔵版美空ひばり』朝日新聞社、一九八九年七月二十日<sup>8)</sup>によると、ひばりの売上げベスト二十がある。昭和二十年、同三十年の歌が十五曲あり、昭和二十年代の歌は、〈りんご追分〉二十七年五月、〈東京キッド〉二十五年七月、〈悲しき口笛〉二十四年九月、〈ひばり

のマドロスさん〉二十九年五月、〈越後獅子の唄〉二十五年十二月、〈私は街の子〉二十六年二月、〈ひばりの花売娘〉二十六年二月、〈お祭りマンボ〉二十七年八月、実に八曲も馴染みの歌が入っている。

ひばりが十二歳（昭和二十四年）のとき映画『ど自慢狂時代』『踊る龍宮城』に出演、『悲しき口笛』に初出演する。

ひばりが十三歳（昭和二十五年）になると映画十三本に出演。

十四歳（昭和二十六年）には、『鞍馬天狗・角兵衛獅子』『ひばりの子守唄』など八本に主演もしくは出演。

十五歳（昭和二十七年）に、浅草国際劇場にて初の正月公演。歌舞伎座で「美空ひばりの会」を公演。九月には、マーガレット・オブライエンが来日、共演映画『二人の瞳』に出演。映画『ひばり姫初夢道中』に主演。この年六本に主演もしくは出演する。

ひばりが十六歳（昭和二十八年）の時、十一月に横浜・磯子区間坂に「ひばり御殿」を完成する。映画は、『お嬢さん社長』『ひばり捕物帳・唄祭り八百八町』など五本に主演・出演している。

十七歳（昭和二十九年）になって初めて「NHK紅白歌合戦」に出る。映画は、『伊豆の踊り子』『七変化狸御殿』など九本に主演もしくは出演している。昭和二十一年、九歳で横浜公演音楽堂にて市民芸能コンクールに出場して、「小雨の丘」を歌い、審査員の久保田万太郎らの評価を得る。デビュー以後たかだか九年でひばりは、昭和二十年代後半に人気・実力両方手に入れたことにならないだろうか。

ひばりを語る上で重要なエピソードが沢山残されている。ひばりは

自身の出自を知っている。魚屋の娘であることも、決して裕福でないことも、その後、有名になるに従ってマスコミのバッシングの中をくぐり抜けていくことになる。

ひばりは、終始一貫して格式とか家柄とか名士とかいう、形や名前だけのものを一番嫌がっていました。そういうものには無縁の下町の魚屋に生まれたこともその理由の一つとも思いますが、(中略)それは歌と芸と絶対に信用のできるファンの存在でした。

小沢さとしが『もうひとりの美空ひばり』の中で指摘している。<sup>9)</sup>この指摘は、ひばりの歌・舞台とファンを結びつけている。ひばりは難しい言葉で喋らないが、その答えは自身の歌・舞台で証明している。音楽の世界においては、クラシック・音楽家・有名な声楽家達が嫌いであった。その理由ははっきりしている。制度としての音楽、有名な音楽と私の歌、どちらがいいのか、このことを判断するのは、ファンに決めてもらえばいいじゃないか。このような言い分がひばりの胸中に存在していた。彼女は幼いにも係わらずファンの存在を知っていた。ファンが沢山レコードを購入し、劇場へ多くの客が訪れてくる。この様なことも目安にしていた節がある。ファン⇨大衆、この等式が成立する基盤として、ひばりの芸を認識してくれているファン⇨大衆が存在していることを、自覚していた。幼いひばりが成長していき、立派な音楽家であることを何人もの人が発言している。ハワイ公演の帰国後、ひばりが変ってきた事実がある。

「一本撮るごとに知名度が増してくる。それは怖いくらいでしたよ。最初は何を言っても『ハイハイ』と聴き、その通りに動いていたのですが、アメリカから帰って来たころから態度が変わってきました。『東京キッド』の時も、台本を読んでつまらないと言ってきたのです。今までのギャグやストーリーの寄せ集めじゃないか、と言うのです。(後略)<sup>10)</sup>」

十三歳(昭和二十五年)の五月にハワイ・アメリカ西海岸の公演のため、川田晴久の引率で母親と渡米する。七月に帰国。ハワイ滞在中の出来事は、第100大隊退役軍人に所属していたトーマス野原から岡村和恵が聞いた話。

「戦後、古賀政男や田中絹代、笠置シズ子とか、ビッグ・ネームが海を渡ったけれど、ことハワイにおいては、川田さんとひばりちゃんの公演ほど盛り上がったものはなかったね。それは、それはすごい人気だった。(後略)<sup>11)</sup>」

ハワイ公演が成功したので、母娘共大きな自信を得た。ひばりも精華学園中等部に進学し、一層詩も含めて言葉の意味を幅広く、深く捉えられるようになった。

もちろん、天才の呼び声高いひばりだから、天分として言葉の理解が備わっていた、と理解したい。

指揮者の岩城宏之は、「テクニクを超越した天才音楽家」のエッセーで、

ひばりさん死去のニュースのあと、「東京キッド」のレコードと

テープを改めて聴き、驚嘆した。十三歳の彼女は、すでに完成品だったのである。もちろんその後の四十年間の、彼女の芸の深まりや、大人としての表現の実りには及ばないが、十三歳の彼女の「東京キッド」に、美空ひばりのすべてがあったのだと思う。<sup>12</sup>

私も同様に「美空ひばりジャズ&スタンダード」の中から「悲しき口笛」「東京キッド」「私は街の子」などのCDを聞いた。メッセージの強い言葉が耳の奥に叙情として残る。ひばりの歌・歌唱には、多くの人が意見を述べている。

あの有名な作曲家の山田耕筰も、「美空ひばりの歌は、立派な芸術です」と明言しています。<sup>13</sup>

ぼく自身、世界中のほとんどあらゆる偉大な音楽家に会ったり一緒に仕事をしてきたが、あれほどの迫力というか、殺気に出会ったことは一度もない。(岩城宏之談『美空ひばり』文春文庫)<sup>14</sup>

同じ岩城宏之の話として次のようなエピソードも伝わっている。オランダの音楽家に何人かの日本人歌手の歌を聞かせた後、美空ひばりの歌を聞かせた。

「柔」が鳴りだした。全員がシーンとなって、聴き入った。さまざまあみろ。「これまでの歌手たちとは、まるで違う。もちろん言葉はわからないが、この女性は、何事かを切々と訴えて、われわれの心を掴む。何だかわからないが、感動した。もう一度聴きたい」何回も何回も、彼らは「柔」を聴いたのだった。<sup>15</sup>

「春のヒットパレード」で、遠慮なくブギを歌い、満員の観客が

らどよめくような拍手を受けました。藤山一郎が生前、私との雑談の中で「あの時は僕や二葉あき子君も喰われた感じでした」と述べ懐いたのを憶えています。<sup>16</sup>

二葉百合子も大のひばりファンで、度々そのステージを観ているのですが、「あの方の歌に接すると胴震いがして二、三日は仕事をする気力が萎えてしまうのです」と率直な口調で話してくれました。<sup>17</sup>

びっくりしました。だつて、子供のくせに子供の声じゃあなかつたんですもの。(中略) 舞台で小さなひばりちゃんや、童謡ではなく、大人の流行歌を地声で叙情豊かに歌うんです。それを聴いて、歌が進むにつれ、私だけでなく、固唾を呑んで聴き入っている観客みんな、劇場全体に鳥肌が立つようでした。<sup>18</sup>

その万城目正がひばりの天分にすっかり惚れ込んだ。<sup>19</sup>

何冊かの本から引用したが、これに類する発言は山ほどある。ただし、ただ歌が「うまい」だけではない。多くのファンが生美空ひばりを観る劇場に通うのは、彼女から発する(どうしようもない)感覚を受容するためである。しかも、東京・名古屋・大阪の劇場では、本場の美空ひばりを観てもらいたい。この場所は、芸術の場である。そのような舞台にすることを母娘は願ひ、その為に当人の衣装と共演者の衣装も奇麗な着物を用意し、舞台上にゴミなどが落ちていないか見て回ったり、演技中客席に寝ている人を発見したら、係の人を通じて注意する。これは、ひばりが舞台に望む完全性にほかならない。

この項の最後にふさわしい引用をする。またまた、岩城宏之の登場である。

やはり、美空ひばりさんは、戦後日本の「歴史」なのである。ひばりさんの歌が、戦後の荒廃した日本人の心に、どれほどの潤い、癒し、喜びを与えたのか、ということはだれでも知っている。「うまい」という言い方をすると、大方のひばりファンから、美空ひばりを軽く見すぎる、という反感を感じるときがある。第一に、彼女は音楽家だった。そして彼女の音楽的才能の偉大さを、全部の日本人にはつきり認識してほしい。<sup>20</sup>

岩城は根っからひばりの歌唱に惚れ込んでいた。その姿は微動だにしない。

昭和二十二年生まれで、パリに在住しながら数多く、作曲家として活躍している吉田進は、テレビの追悼番組で《悲しい酒》を、「悲しみの極みで、泣きながら歌っているのに、決して感情に溺れて、歌が破綻を見せることはない。涙で震える声も、嗚咽も、そのまま、歌の表現の一部に化してしまっている。心は技術であり、技術は心である、と言った方が、正確だろう。うまい、という言葉は、美空ひばりの前に、その意味を失う。これは、芸術のあるべき姿の極限である。」と語って、ひばりを賞賛する。<sup>21</sup>

思想家の吉本隆明は、ひばりを称して次のように書いている。

美空ひばりの歌唱力は、古典音楽の歌手も、歌謡曲の歌手も、ニュー・ミュージックの歌手もすべて含めて、世界で数えるほど

の水準にある、ほとんど唯一の例だとおもう。

ひと口でいえば、メロディを歌詞の言葉のほうに引き寄せ、言葉に同一化してしまうことだとおもう。<sup>22</sup>

吉本ならではの分析を通して、ひばりを世界水準にある歌手として評価している。

これら三氏の発言は、どれを切りとっても、世界有数の芸術家であり、音楽家であり、戦後の日本人に多くの潤い、癒し、喜びを与えた人物と評価している。戦後生まれの私達は、彼女の歌声をラジオやレコードを媒介にして知ったのも事実である。そして、知らぬ間に彼女の歌を口ずさみ、気分が高まっている時は鼻歌になり、悔し涙を落したり、どうしようもない憤りを感じた場合も、メロディーや歌詞の一部を、脳裏に焼き付けたことだろう。彼女が生涯歌った数は一〇三三曲（一部では一四〇〇曲）、その中に私たち自身が慰撫された歌は数知れないと思う。

## ② 社会問題―暴力団・弟達の不祥事、マスコミの攻撃

わずか八歳でデビューした美空ひばりは、母と共に苦難の道を歩み出した。彼女の天分と、それに付随する名声とお金、出自が魚屋。どこから見ても庶民なのに、マスコミはいたる所で攻撃する。また、マスコミ以外にも文化人からの〈いじめ〉もあり、風習を知らないといっている〈いじめ〉芸能慣例を遵守しないからといっては〈いじめ〉であった節がある。

飯沢匡が編集長をつとめる『婦人朝日』の「児童の福祉」には、嫌悪感がちらちら見える文章と十一枚の写真で構成されている。

ラジオでできていると完全に大年増の歌手しか思えない。舞台上でみるとそんなしわがれた声がいけない子供肉體から出てくるので不思議な戸惑いを感じる。こういった「奇形な大人」を狙った小歌手が目下、大いに持て囃されている。

タイハイした大人の猿真似を子供にさせることを存続さすべきか否かは、観客が客足によって定めればいいことで、法律で圧迫すべきでないだろう。

本田靖春は、「児童の福祉」に対し、「稼ぐ」「天才児童」という表現の底にあるねたみ心は（名声とみに高まると父親の門札が遠慮してきたのは当然の理。嫉妬で陰口たたいた近所の者も急にこびへつらい始めたとは母親の言葉だが、（後略）目を凝らさないと「加藤増吉」とは読めない木製の表札のわきに、それよりひと回り大きい白の石材に「美空ひばり」と彫って墨を入れた表札が掲げられている。そこを撮った写真の説明が（名声とみに……）であり、公平に見て冷静な批判とはいいがたい。

『婦人朝日』の「児童の福祉」は、多少遠慮しながらも、嫉妬とねたみで構成した。昭和二十四年、ひばりが十二歳の頃である。戦争に負け、物資が不足している時代に、およそ、豊かさ懸け離れた時代に、歌声で慰撫した歌手の一人ともいえる。物資と金がない時代に、美空ひばりだけ、なぜ金が入り込むのだろう。近所の人は勿論、飯沢

匡もその現象に我慢できなかった一人だった。

文化人の批判はなおも続き、サトウ・ハチローは『東京タイムス』のコラム「見たり聞いたりためしたり」で、

近頃でのボクのきらいなものはプギウギを唄う少女幼女だ。一度聞いたらやりきれなくなった。消えてなくなれどなりたくなつた。吐きたくなくなった。いったい、あれは何なのだ。あんな不気味なものほちよつとほかにはない。可愛らしさとか、あどけなさがあるでないんだから怪物、バケモノのたぐいだ。あれをやらせてトクトクとしている親のことを思うと寒気がする。あれをかけて興行している奴のことを思うと、はり倒したくなる。

有名になった引用句だが、ここまで表現しなかつたが、三木鶏郎だって、不快感を表わしている。

昭和二十六年十二月に心理学者の竹山恒寿が中学二年生のひばりと対談している。ひばりは唯我独尊だ。思うことが必ず通るようにしむけられて来たし、自分でもそうならなければ承知しない。

その年の三月に週刊朝日の記事には、マスコミ担当者がひばりにインタビューを申し込んだが、ひばりに会えなかつたり、ひばりが拒否すると、嫌味たっぷりの記事を書く。ひばりが去年アメリカへ行くとき、スプーンの持ち方一つ知らなかつた母親が、このごろはニュールックで芸術論をぶちまくるようになった。親の光りということがあるが、ここは逆に娘の光りという奴である。

文化人はひばりが嫌いなのである。日本の古い文化人は、時間

をかけて、名声・富を獲得していく構図を描いていた。

近藤日出造さんが漫画を描いたんです。おふくろが魚屋のおかみさんだからっていうので、長靴を履いて、それで魚の絵の旗を持って立って、その懐からお札がこぼれ落ちてるんですよ。<sup>23</sup>

当のひばり側からいうと、我慢のならない一コマ漫画だった。しかし、誤解してはいけない、近藤日出造は、風刺画を描き、ひばりが〈えげつない〉と感じても、仕方がない。近藤日出造は、社会をよく見ていたし、軽妙でいて、核心をえぐり出す画法だからこそ、風刺画として第一線で活躍できた。

昭和二十八年十月の週刊サンケイで岩田専太郎との対談で幼いひばりに、大人が舐めた態度で接する情景がよくわかる。

岩田 君の一番いやなことってなに？

美空 新聞記者と話をすると、叱られるからこわいの。何処の土地に行っても新聞記者が来るでしょう、たたかれるから怖い。

岩田 たたかれるって？

美空 悪口云われるんです。

母 ……：相手が子供だと思っただか、立てひざなんかして、いったい幾らお金をとっているんだい、なんていやな事ばかり訊くんです。

劇場関係者の腹の中は、大劇場に進出したひばりさんに対して、周囲に「たかが歌うたいが！」という反感を持っていた。

この後も新聞、雑誌が「二千万円盗難事件」をセンセーショナルに報じた。「なぜ、そんな大金を隠していたのか？」「ひばりファミリーの仰天金銭感覚！」などと好奇の目がそそがれた。

北海道の公演中、ある新聞社から連絡があった。「黛ジュンさんが、『真赤な太陽』をレコーディングしましたよ」というのだ。ひばりさんは、「ああそうですか。別にしようがないんじゃない」と答えた。ところが、翌日の朝刊は「激怒するひばり」と報じたのである。これに端を発して「つくられた騒動」はひとり歩きを始め、センセーショナルに伝えられた。<sup>24</sup>

芸能界の暗部を赤裸々にしたい気持、子供の発言を大人の世界にのせて揶揄しようとする、記者の態度。ひばりと母親は何十年も叩かれながら強くなった。この強さは、田中角栄元首相に次いで、ひばりだろう。戦後、マスコミに叩かれ、叩かれ強かったのは田中角栄元首相である。昨今些細な不始末で、マスコミで取上げられ、自殺した人は多い。その渦中の当事者が耐え忍んでいる姿は大きく映る。このことは、ひばりの実妹の佐藤勢津子が述べている。

私たち家族は想像以上に、いわれない醜聞にさらされてきました。でも必要以上の反論はしませんでしたし、じっと耐えています。この賢さを、長い年月を経て学んでいました。<sup>25</sup>

それでは、当人はどう思っていたのだろうか。

当時の評論家がひばりの『リング追分』をコジキ節と嘲笑したというのですが、どうしてそんな言葉が出てきたのかまったくわ



かりません。<sup>26)</sup>

今までずっと、マスコミに対して、かたくなに口を閉ざして音無しのかまえで通し続けたことに対して、母喜美枝は、私たちのことを理解してくれる人があれば、こちらから電話してお願いしてでもしゃべりたかったです。ところが、一生懸命にしゃべって、やっとわかってもらえたと思つて喜んでみると、翌日の新聞を見てガツカリする、そういうことのくり返しだったんです。その時お嬢が「黙して語らずのほうが勇気があるのよ」と言つたんです。それで沈黙を守っていたら別の道が開けてきたんですね。<sup>27)</sup>

まさしく〈ひばりと母〉は、忍耐を現実から学んだ。本当の事を語つても、真実を喋つても、その事実を取上げてくれない。いい訳など喋ろうものなら、格好のマスコミの餌食になることも知っている。

歌唱は独自の世界を創り上げ、舞台は、芸術まで高めた。戦後の〈ひばり〉の活動は多難であったが、多くの人に〈ひばり〉を与え、浸透させた功績は大きい。本物の舞台を見ることができなかったのは至極残念であるが、〈ひばり〉のCDは現在も売られている。文化や自然の世界遺産と同様に〈ひばり〉の歌唱を文化遺産として聴くこともできる。

註

(1) TOSHIBA-EMI LIMITED から出された「懐かしのCMソング大

全 昭和二十六年～昭和三十四年)

- (2) 三木鶏郎資料館ホームページ <http://www.mikioritiro.jp/>
- (3) 「兼高かおる世界の旅」兼高かおる、講談社、昭和四十二年
- (4) 朝日新聞縮刷版 昭和三十一年、No四一五号、朝日新聞社
- (5) フリー百科事典 ウィキペディア
- (6) 川本三郎「映画史の仇花・新東宝物語」、中央公論社、昭和五十一年十一月特別号
- (7) 朝日新聞縮刷版 昭和三十一年～同三十四年  
昭和三十年、No四〇三号 朝日新聞社  
昭和三十一年、No四一七号 朝日新聞社  
昭和三十三年、No四三九号 朝日新聞社  
昭和三十四年、No四五一号 朝日新聞社
- (8) 『愛蔵版美空ひばり』平成元年、朝日新聞社
- (9) 『もつひとりの美空ひばり』小沢さとし、総和社、平成九年
- (10) 『川田晴久と美空ひばり』橋本治・岡村和恵、中央公論社、平成十五年
- (11) 註(10)に同じ。
- (12) 『資料集美空ひばり人と芸』美空ひばりアカデミー21、平成十七年
- (13) 註(9)に同じ。
- (14) 註(9)に同じ。
- (15) 註(12)に同じ。
- (16) 『愛燦燦と…美空ひばり物語』池田憲一 星雲社、平成十年
- (17) 註(16)に同じ。
- (18) 註(10)に同じ。
- (19) 『戦後』—美空ひばりとその時代、本田靖春 講談社、昭和六十二年
- (20) 註(12)に同じ。
- (21) 註(12)に同じ。
- (22) 註(12)に同じ。

- (23) 註(19)に同じ。
- (24) 『花のいのち』、黒田耕司、小学館、平成二年
- (25) 註(23)に同じ。
- (26) 註(9)に同じ。
- (27) 註(9)に同じ。